

相手に応じたよりよい伝え方を積極的に身に付けよう

～手話の言語としての豊かさに学ぶ中で～

北栄町立北条中学校

〒689-2111
鳥取県東伯郡北栄町土下100-1

<http://www.torikyo.ed.jp/hojo-j/>

1. 研究の背景

本校は、鳥取県中部に位置し、農業を主産業とする地域を校区としていますが、保護者の多くは隣接する倉吉市内の企業等に勤務しています。

本校は、今年度生徒数188名、学級数は9学級あり、内特別支援学級が2学級（知的障がい学級1、自閉症・情緒障がい学級1）が設置され、特別支援学級には7名の生徒が在籍しています。本校は、平成25年度にパナソニック教育財団の助成を得て「他者を意識した客観的でよりよい伝え方を身に付けよう」をテーマに研究に取り組み、特別支援学級で、互いの表現を映像で記録・評価しながらより良い人間関係の構築を図ってきました。その中で生徒たちは、フリップや目線など相手に伝わりやすい表現の工夫を身につけました。

そんな折、平成25年10月11日に、本県で全国初となる「鳥取県手話言語条例」が制定され、生活の様々な場面や、県民向けテレビ番組などで手話に触れられるようになりました。本校でも、手話を母語とする方をゲストティーチャーとして招き、「寝言を言うとき、手も手話の動きをする」ことや、「手話だけでなく、身振り・筆談など交え、相手に伝えようとする気持ちを大切にしてほしい」との願いをうかがい、生徒は早速朝の会のあいさつに「おはよう」の手話を取り入れるなど、表現の工夫を始めています。

2. 研究の目的

本研究は、中学校の特別支援学級を中心にしながら、広く生徒のコミュニケーションスキル、ソーシャルスキルの向上を目指して、手話の言語としての豊かさにふれる中で、積極的に多様なコミュニケーションを取り入れ、いっそう豊かな人間関係の醸成を目指そうとするものです。

タブレット端末を使っての表現の相互評価や交流を推進し、いっそう相手を意識した積極的なコミュニケーションの姿勢が育まれると考えます。これらの研究実践から得られる知見は、多くの学校や関係機関への参考となるものと考えます。

3. 研究の方法

今年度は、多くの表現を身に付けることよりも、自分に関係すること、自分が伝えたいことに的を絞って繰り返し学ぶことを大切にしようと考えました。

あいさつや、名前、自分の好きなことなどを手話で練習し、タブレット端末で録画して評価することでより良い表現となるよう工夫するよう心がけました。また、手話をきっかけにしながら、「他者を意識した客観的でよりよい伝え方を身に付けよう」というこれまでからのテーマに沿って、各教科で「相手に応じた気持

ちの伝え方」や「相手に応じたアドバイスの仕方」などについて考える場面を設定していくよう心がけました。手話でも、他の場面でも、「伝えたい」という気持ちが自然に表現・発言につながっていくように配慮しました。

特別支援学級では、校区内小学校との交流において、タブレット端末を移設して積極的にテレビ電話による計画づくりを行い、移動時間を省き、新しいコミュニケーションに期待を持ちながら交流に向けて気持ちが高められるよう工夫しました。

通信環境の検証については、本校はLTEエリアのわずかに外側に位置するため、3G回線、有線回線+Wifi、可能であればLTE回線などを比較し、手話など動きの速い画像においてテレビ電話が可能になる回線とアプリの組み合わせを実証実験したいと考えました。

4. 研究の内容・経過

(1) 特別支援学級における校区内小学校との交流

本校では、毎年中学校と校区内小学校で、在籍する特別支援学級在籍生徒の交流を行っています。これまで、その打合せのために相互に行き来しながら計画づくりを進めていましたが、今年度は通信回線速度の検証を兼ねて、iPadを用いたテレビ電話を活用して打合せと自己紹介を行いました。

通信環境としては、

iPad (Wi-Fi) → モバイルルーター → MVNO回線 (docomo 回線使用) → モバイルルーター → iPad (Wi-Fi)

通信ソフトにはSkypeを用いることとしました。

テレビ電話回線を利用した交流は初めての児童・生徒がほとんどで、特に小学校の児童は次々に質問をしたり、自己紹介しようとする姿勢が見られ、これまでにない積極的な交流となりました。

中学校の生徒はさすがに落ちついた態度で受け答えをしながら、初めてのビデオ通話での交流を通して、交流に必要な名簿づくりやプログラムづくりのために小学校の児童の情報を手際よく集める姿が印象的でした。

しかし、この交流を通して、動画（特に小学校の児童の速い動き）が相手側では流れて見えにくいという状況が続きました。

一般的な例ではSkypeビデオ通話1分で、36,000KB=36MB程度のデータ量が発生すると紹介されています。今回ビデオ通話による交流を20分ほど予定していたので、交流が延長した場合、契約しているMVNO回線のデータ量(1GB/1月)を1日で使い切る可能性もあり心配していたのですが、交流



が終わった後確認してみると、20分の交流でも60MB程しかデータ量が発生していなかったことが判明しました。

このことは、裏を返せばデータ転送に遅延が生じ、通常の使用状況よりも極端に少ない、1/10ほどのデータ量しか発生しなかったことを示しています。

中学校の校内でテストを行っても、通信回線はLTE回線と3G回線が時折切り替わる状況で、モバイルルータを経由してスムーズなビデオ通話を行うことは、実質的に困難であることが明らかになりました。

また、本校の規定で、校内LANに接続可能な機器を、町予算で購入され、ウイルス対策が施された生徒用・職員用PCに限定しているため、ウイルス対策が施されていないタブレット端末を校内LANに接続することについての懸念も指摘され、どのような形でビデオ通話を行うのがよいのか再検討が必要になりました。



(2) 文化祭に向けての取組み

本校では、11月に校内文化祭を行い、総合的な学習の時間の取組みの一端を保護者や町内の方に披露する場としています。

昨年度から、2年生が手話に学ぶ取り組みを行っており、今年度は一歩進めて、学習した内容を、手話を交えて劇に仕立て、発表することとしました。

大判プリンタを用いて、県教育委員会発行の手話ハンドブック（入門編・活用編）などを参考に、拡大印刷して活用しました。

また、手話について直接学ぶ機会として、講師の方を招いて、手話の成り立ちや歴史、聴覚に障がいのある人とのコミュニケーションのとり方などを伺い、その後で、実際に身近な手話を学んでお互いに表現しあいました。

また、毎年取り組んでいただいている保護者コーラスについても、今年は、指導者の方が手話を交えたコーラスを提案し



てくださり、大判プリンタで歌詞の手話表現を印刷して提示し、練習会で活用しました。

文化祭当日は、2年生の劇で、代表による最後のメッセージも手話を交えて発表し、来場の方から好評をいただきました。保護者コーラスも全員で手話を交えて発表でき、参加された方も、聞かれた方も大変思い出深いものになりました。



(3) 相手に応じたよりよい伝え方

手話を中心として「自分が伝えたいことを相手に届きやすいように伝える」取り組みの中で、教科においても、これまでから本校が取り組んできた「他者を意識した客観的でよりよい伝え方を身に付けよう」をテーマとして授業研究に取り組みました。

・英語科において

「ALTの先生をガイドしよう」という単元を設定してビデオ通話を活用しながら、校舎内を英語で道案内しました。目的地まで誘導するのに様々な英語の表現が必要になります。生徒たちは代表の子も、そうでない子も何とか自分の知っている表現の中から伝わりやすい文書をひねり出し、伝えようとする一生懸命な姿が大変印象的でした。

また、一人の発言に対して多くの生徒が「〇〇はどう?」「△△の方がいいと思う」などと改善を即座に提案する場面が見られました。

英語で表現しようとするとき、教科書にあるから、問題集にあるから、という状況と違い、今ここで伝えなければALTの先生が案内できないという切羽詰った状況が生徒のコミュニケーションへの意欲を高めたと考えています。



・保健体育科において

「マット運動でお互いの演技のよいところを伝え合おう」という単元を設定してタブレット端末で演技を録画して相互に評価する取組みを行いました。

自分の演技の様子を見るのも初めてという生徒がほとんどでしたが、操作にはすぐに慣れ、お互いの演技の良いところを認め、困っているところは「〇〇してみたら」

「私は△△に気をつけている」などのアドバイスをしあう姿が見られました。

そして、困ったときには先生のところに駆け寄り一緒になって改善の方法を探しました。

上手な生徒には「模範演技は動画を永久保存するよ」と告げれば、完璧な演技を目指して繰り返し改善を試みる姿が見られました。

これまで、一瞬で消えていた演技が、その場で、すぐに、何度でも、そして必要なら大画面テレビで全員で共有しながら確認でき、生徒の学習の姿勢が劇的に変化しました。



5. 研究の成果

当初想定していたように「他者を意識した客観的でよりよい伝え方を身に付けよう」という観点で実践を進めることができ、昨年度までの特別支援学級の生徒だけでなく、全校へ取組みを拡げることができました。特に手話においても、教科の学習においても昨年度までの実践を一步進めて、「表現する」「相手に伝える」ことを意識することで、生徒たちの意欲が高まる場面を多く目にすることができました。

6. 今後の課題・展望

課題としては、任意の場所においてビデオ通話システムを利用して手話の動きに対応できる十分なスピードを確保する手段が十分に明らかにできなかったことがあげられます。小学校との交流、手話通訳ボランティアさんの支援を受けるなどの場合に、・通信料金がさほどかからず、・校内LANのセキュリティに問題を生じず、・実用に耐えうるスピードを確保する方法について、引き続きの検討を行います。

タブレットの台数の充実も含め、いっそうの充実を図りたいと考えます。

< 参考文献 >

・手話ハンドブック(入門編)、(活用編):鳥取県教育委員会